

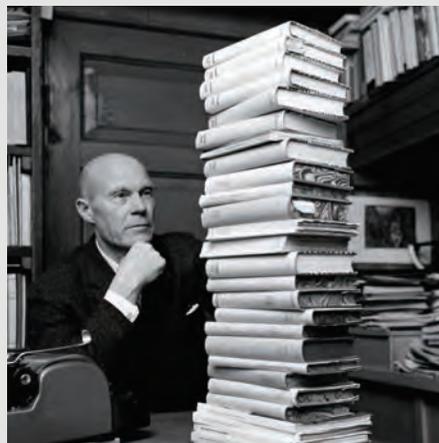
TARJEI VESAAS  
Collection

## タリアイ・ヴェーソス コレクション

朝田千恵／

アンネ・ランデ・ペータス＊訳

国書刊行会



### タ リ ア イ ・ ヴェ ー ソ ス

20世紀ノルウェー文学を代表する作家・詩人。1897年、テレマルク県ヴィニエ生まれ。主にノルウェーの自然豊かな田舎を舞台に、孤独や不安といった、根源的で普遍的な人間の感情を平易な文体で描き、独特な神秘の世界へと誘う作品を手掛ける。代表作は『風』(1952)『鳥』(1957)『氷の城』(1963)などで、作品はすべてニーノシュク(ノルウェーの公用書き言葉のひとつ)で執筆した。北欧理事会文学賞、ヴェニス国際文学賞などの数々の文学賞を受賞し、ノーベル文学賞に幾度もノミネートされた。1970年逝去。現在、世界的に再評価が進み、ベンギン・クラシックスをはじめ各国で作品が翻訳刊行されている。

四六判・上製カバー装

装画＊アイナル・シグスタド(Einar Sigstad) 装幀＊アルビレオ  
各巻予価2400円＋税 平均350頁

第一回配本

『氷の城』2022年4月刊行

(以後半年毎に刊行予定)

国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15

TEL.03-5970-7421 FAX.03-5970-7427

<https://www.kokusho.co.jp> e-mail:info@kokusho.co.jp

静謐で繊細な、  
さわめて美しい物語。

自然豊かな田舎を舞台に、孤独や不安といった人間の根源的な感情を平明な文体で描き、独特な神秘の世界へと誘う作品を手掛けた、20世紀ノルウェー最高の作家タリアイ・ヴェーソス。近年ベンギン・クラシックスにも入った世界的に〈再発見〉が進む巨匠の代表作を、本邦で初めて集成。静謐で繊細な、さわめて美しい物語の数々を、満を持して刊行する。

## 『鳥』

\* 本邦初訳

Fuglane (1957) ISBN 978-4-336-07251-1

軽度の知的障害を抱える善良な青年マッティスは、姉のヘーゲとたったふたり、湖畔の小さな家で細々と暮らしていた。ヘーゲに勧められ、マッティスは湖の船頭として働くことを決める。しかしある夏の日、船客として現れた木樵ヨルゲンにヘーゲが恋をし、マッティスは姉との別離を予感して不安に襲われる……雄大な自然を背景に、孤独な者の鋭敏な感性、人間関係の緊張を劇的にとらえた、20世紀文学の最高傑作。

「タリアイ・ヴェーソスはノルウェー最高の小説『鳥』を書いた。実に素晴らしく、文章はきわめて平易かつ繊細で、物語はきわめて感動的。もしメジャーな言語で書かれていたならば、20世紀の偉大な古典中の古典に数えられていただろう。」

——カール・オーヴェ・クナウスゴール(諾・作家)

## 『風』

\* 本邦初訳

Vindane (1952) ISBN 978-4-336-07252-8

繊細で美しい筆致と清新な視点から人間心理を濃やかに描き上げた、著者最高の短篇集。教科書採録作としてノルウェー国民の誰もが知る、一匹の蟻の一生を寓意的に描いた名篇「勇敢な蟻」、一日の仕事を終えた若い木樵が、あえて森に独りで残り自然の神秘を味わう「最後に帰る男」、冬の終わり、小さな女の子が飼った猫の赤ちゃんが誕生するのを待ち望む「春の和らぎ」など、ユーモラスで心温まる話から、寂しく切ない話、不思議な余韻を残す幻想的な話まで、多彩な味わいの全13篇を収める。1953年度ヴェニス国際文学賞受賞作。

収録作

「勇敢な蟻」 Ein motig maur	「海の向こうの小麦」 Kornet over havet
「凶暴な騎士」 Den ville ridaren	「はだか」 Naken
「胡椒の実」 Peparkorn	「落下」 Fall
「誕生日」 Fødedag	「春の和らぎ」 Tøyveret
「トラスク坊や」 Vesle-Trask	「不思議なこと」 Det rare
「最後に帰る男」 Siste-mann heim	「のろま」 Tusten
「土曜の夜」 Laurdagskveld	

## 第一回配本

## 『氷の城』

Is-slottet (1963)

ISBN 978-4-336-07250-4

雪に閉ざされたノルウェーの田舎町。ある時、11歳の少女シスが通う学校に、同じ年の少女ウンが転入してくる。ふたりは探り合うように距離を縮め、まもなく運命的な絆で結ばれるが、ウンは森深くの滝の麓につくられた神秘的なく氷の城へ行ったとき、姿を消してしまう……特別な関係、孤独、喪失からの回復を、凍とした文体で幻想的かつ象徴的に描き上げたヴェーソスの代表作。1965年度北欧理事会文学賞受賞作。

私がかれまで出版した最高の小説  
——ピーター・オーウェン(英)ピーター・オーウェン社社主

なぜ世界一有名でないのかが不思議な本  
——マックス・ポーター(英)作家

誰にも会いたくない日に読んだ。静かな言葉で書かれるからこそ、少女二人の燃えるような気持ち胸にぎゅっと迫ってくる。冬の物語で、紙面の余白の白さが、湖面にみえる。氷の分厚くなるときの音、完璧な美しい氷の城。景色が美しいことが、かなしい、そう思ってしまう物語だった。  
——朝吹真理子(作家)

なんと平明で、繊細で、力強く、類のない小説だろう。唯一無二の、忘れがたい傑作だ。  
——ドリス・レッシング(英)ノーベル文学賞作家



刊行によせて

朝田千恵 / アンネ・ランデ・ペータス

ヴェーソスと言えば二十世紀を代表するノルウェーの大作家ですが、日本ではこれまでに『氷の城』しか紹介されてきませんでした。今回、再訳を含むヴェーソスの代表作三作を翻訳するという、思ってもみない貴重な機会に恵まれました。訳者ふたり作品を改めてじっくり読み込むなか、シンプルなことばに隠された物語の奥深さに驚くばかり。日本語に訳したときに見える、ヴェーソスの執筆スタイルなど、新たな発見もありました。淡々とした自然描写に投影される登場人物の心の機微、季節の移ろいに生命のはかなさなど、急いで読むと見逃してしまい、そうなることもあるかもしれません。どうか読者のみなさんには、私たち訳者がしてきたように、ゆっくと、あるいは二度、三度と読んでいただき、ヴェーソスの世界をじっくりと味わっていただければと願っています。

少女同士をつる想いが結晶化したかのような氷の城。北欧の大自然の厳しさが、優しさが、激しくて切ない行く末を予感させる。大人になっていくことの残酷さとイノセンスからの解放を、こんな風に鮮烈に描いた物語を他に知らない。

——山崎まどか(コラムニスト)